

「奉献生活の年」



週報

カトリック 園田教会

B年

2015年
2月18日(水)

No. —



灰の水曜日（四旬節）

（大斎・小斎）

ミ サ 19:00 ポナツィ神父

四旬節愛の献金（四旬節中）

今日の聖歌と祈り

入祭の歌 : 典礼聖歌 77 神よ あなたの道をしめし

答唱詩編 : 「聖書と典礼」をご覧ください

詠 唱 : 「聖書と典礼」をご覧ください

奉納の歌 : 典礼聖歌 70 神よ あなたの顔の光を

主の祈り : プリント 主の祈り

拝領の歌 : プリント ひせきに こもりて（カトリック聖歌246番）

閉祭の歌 : プリント あわれみの み心よ（カトリック聖歌161番）

今日の典礼奉仕者

先唱	田口
聖体奉仕	Sr.辻家
第1朗読者	チュウン
第2朗読者	上島(婦)
共同祈願・意向担当者	① 池田 ② 豊嶋 ③ 平田 ④ 市瀬
奉納と献金	総務委員会
典礼当番	細木
答唱詩編	全員
オルガン奉仕者	石垣

典礼解説から

【灰の水曜日】

古代のキリスト者は、受難の苦しみを通して復活の栄光に入ったキリストの過越を祝う復活祭を迎えるために、キリストにならって40日の断食による節制の期間を設けました。

灰は粗布とともに、断食や回心などと結びつけられて聖書の中で言及されています(ヨシュア7・6、ヨナ3・6、マタイ11・21など)。古代の教会では、罪を犯した人は四旬節が始まるときに教会共同体から引き離され、公の回心のしるしとして粗布をまとい、灰をかぶって四旬節を過ごしました。このような公の回心は10世紀終わりごろまでに廃れてしまいましたが、灰を受けることが残り、灰の水曜日の式となりました。

また、罪を犯した人だけでなく、彼らへの連体の意識から他の信者も灰の水曜日の式に参加するようになりました。そして、教皇ウルバノ2世(在位1088~1099年)の時代のベネヴェント教会会議(1091年)の教令で、聖職者も信徒も全員が灰を受けることが定められ、教会全体での実践へと発展しました。前年の受難の主日(枝の主日)に祝福された枝を燃やした灰を受けるといふ実践は、12世紀以降に始まりました。